慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	道助法親王家五十首の基礎的考察 : 伝本分類・ 本文・ 合点を中心に
Sub Title	
Author	太田, 克也(Ōta, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.17- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0017
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

道助法親王家五十首の基礎的考察

――伝本分類・本文・合点を中心に――

太田克也

はじめに

稿者は以前、「道助法親王家五十首の伝本について―田中穣氏旧蔵典籍古文書所収「建保五十首」の翻刻と簡校―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』二二八、二〇二一。以下「前稿」と称する）において、道助法親王家五十首の一伝本を紹介したことがある。そこでは本五十首の基礎的研究が十分に行われていないことから、新たに諸本を分類した上で、善本とみられる田中本について、それまで知られていた伝本と比較しつつ報告したのであった。

前稿では田中本の紹介を中心とし、また調査も途上であったため諸本全体に亘る考察ができず、調査を継続して続稿に委ねる旨を記していた。そしてその通りに調査を続けていたのだが、昨今の社会情勢や諸般の事情もあって、完遂することが困難な状況にあった。今もその状況に大きな変化はないのだが、考察に十分な程度の資料は揃ったことであるし、いたずらに公表を先延ばしにしても見解が大きく相違することはないであろうから、現時点での調査に基づく報告を行うことにした。

そこで本稿では、道助法親王家五十首の伝本に関する基礎的整理の結果を報告する。まず諸本を分類しつつ概観する。次いで本文の特徴について記述し、さらに合点の分布状況について述べる。

一、分類と概観

本五十首の伝本は、残欠本や家集からの抄出本を含めると、三十本を数える。この中には所在が不明確なものもあり、また目録等では一見して本五十首の伝本と認識できないものもあろうから、この数字は多少増減するかもしれない。この他に古筆切が二種類あるが、一方は既に詳細な研究が備わり、もう一方は一葉のみなので、本稿では対象としない。[1] ここでは完本のうち、分類に必要な情報を確認できた伝本に限って取り扱う。[2]

前稿で述べたように、諸本は書式の違いによって、大まかに四つの系統に分類することができる。現在確認できている伝本には、異本と呼べるような著しい相違を有するものは見当たらないので、この分類はあくまで伝本間の関係性を考えるための便宜的なものである。前稿で示した分類とその基準には一部修

正を施す必要が生じているので、以下に諸本を分類し直し、その基準について述べた上で、書式や書誌の面から概観する。

一-一、分類とその基準

諸本を分類すると次のようになる。[3]

第一系統

国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本（H・六〇〇・七〇七）　※略称「**高松**」

島原図書館肥前島原松平文庫蔵本（一三九・五五）　※略称「**松平**」

神宮文庫蔵本（三・六九五）　※略称「**神点**」

丹波篠山市立青山歴史村蔵本（二四〇）　※略称「**青光**」

穂久邇文庫蔵本　※略称「**穂久**」

第二系統

*慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本（B一・ト二四六・一）　※略称「**斯道**」

*天理大学附属天理図書館蔵本（九一一・二四・イ九五）　※略称「**天理**」

*早稲田大学図書館蔵本（ヘ〇四・〇八一三七）　※略称「**早大**」

国立歴史民俗博物館蔵田中穣氏旧蔵典籍古文書所収本（H・七四三・一一七）　※略称「**田中**」

実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本（A三四五）　※略称「山岸**」

名古屋大学附属図書館後藤文庫蔵本（九一一・一四五・G）　※略称「後藤**」

多和文庫蔵本（二八・二）　※略称「**多和**」

***天理大学附属天理図書館蔵点取和歌類聚所収本（九一・二九・イ三）　※略称「**天類**」

***樋口芳麻呂氏蔵点取和歌類聚所収本　※略称「**樋口**」

松井明之氏蔵本　※略称「**松井**」

第三系統

京都大学附属図書館中院文庫蔵本（中院・VI・八四）　※略称「**京大**」

宮内庁書陵部蔵本（五〇一・八三四）　※略称「**宮書**」

国立公文書館内閣文庫蔵昌平坂学問所旧蔵本（二〇一・二七三）　※略称「**内昌**」

第四系統

****国立公文書館内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本（二〇一・二六八）　※略称「**内和**」

****神宮文庫蔵本（三・七八六）　※略称「**神宮**」

****丹波篠山市立青山歴史村蔵本（二四五）　※略称「**青道**」

群書類従巻第一七七和歌部三十二所収本　※略称「**群書**」

分類のための第一の基準は、秋部の擣衣幽題にある二首の歌順である。『新編国歌大観』（底本は**高松**）に拠って示すと次の如くである。

630たえだえにきぬたの音ぞよわるなるそなたの風やふきかはらむ

631ちかからぬよその砧もおとづれぬ人のしづまる秋のよなよな

これが正順である伝本を以て第一系統とし、逆順である伝本を第二系統以下とする。ところでこの歌順には、正逆どちらが正しいのかという問題がある。『新編国歌大観』は掲出の順を正順とするが、その根拠は示していない。この二首には他出がなく、古筆切にも当該歌を含む切が見つかっていないため、現時点で明らかにすることはできないのだが、第二系統に属する伝本に時代を遡ることのできるものが多いことを考えると、本来の姿を留めているのは逆順であるように思う。

第二の基準は出題者・加点者の有無である。**田中**に拠って示すと次の如くである。

建保六年御歳廿三　出題　定家卿

御点　上皇後鳥羽院歟

これを有する伝本を以て第二系統とする。第一系統に属する伝本も出題者・加点者を持つが、その前に御詠に関する注記が存する。**高松**に拠って示すと次の如くである。

御詠　道助法親王俗名長仁　仁和寺　御室第五宮号光台寺　母同頼仁親王内大臣信清女

順徳院　紀号　法親王戊寅年

このことから、第一系統と第二系統には接点があるものの、やはり区別があることになる。なお**群書**にも出題者・加点者が見られるが、これは本文を作成する際、主に第二系統に属する本を利用したためと考えられる（**二―四**節参照）ので、第二系統には分類しなかった。

第三の基準は秋部の山家月題の下に付される注記の有無である。**京大**に拠って示すと次の如くである。

家に五十首哥よみ侍けるに山家入ー道助（読ヤ）

とふ人もあらし吹そふみ山へに木葉わけくる秋のよの月不審云々

これを有する伝本を以て第三系統とする。これは今のところ他系統の伝本には見られない注記である。そして残った伝本を以て第四系統とする。

以上が諸本を分類するための簡便な基準である。この基準に拠れば、今回取り扱うことのできなかった伝本もいずれかの系統に分類できるであろう。ただし写本の場合、書式は容易に変更されてしまうので、本文や合点なども併せて確認した上で、どの系統に属するかを判断する必要がある。

一―二、概観

書式や書誌の面から諸本を概観する。ただし冒頭に述べた事情により実見できていないものが多いので、詳細な書誌を記述することが目的なのではないことを理解されたい。**表1**には、分類に用いた基準に加えて、主要な書式を一覧にして示した[4]。以下、これに基づいて述べる。

第一系統に属する伝本は五本ある。このうち**青光**・**穂久**・**松平**は「道久[5]」の署名がある本を祖本とし、**高松**・**神点**は祖本についての情報を持たない。いずれも江戸時代の書写と見られる。奥書によれば、**青光**は寛文四年（一六六四）に烏丸光広筆本を、**穂久**は慶安四年（一六五一）に飛鳥井雅章筆本を写したものである。**高松**や**松平**の所蔵者をも考慮すると、この系統の伝本は近世堂上公家周辺に存在した本から広まったものである

と言えるだろう。

主要な書式はほぼ共通している。**神点**はやや違いが見られるが、この系統の書式を削ぎ落としたような感じであるから、そう隔たるものではない。この系統に特徴的なのは、末尾に「良宗案」で始まる後鳥羽院についての注記を有することである。出題者・加点者の前にある「御詠」に関する注記もこの系統にのみ見られるので、もしかしたら一具のものであるのかもしれない。なお前稿でも述べたように、良宗の素性は未だ明らかでなく、道久と関係があるのかどうかも不明である。

各本の特記事項は以下の通りである。**高松**は最勝四天王院障子和歌と合写されている。この点**斯道**と共通するため、両本に何らかの関連を疑いたくなるが、書式や異同などを見るに同一の本から発生したとは考え難い。**松平**は合点が行路梅題辺りから長短の区別をしているように見える。また本文には異同が注記されているが、どのような本に拠ったのかはわからない。**神点**は歌順[6]が79脱、109脱、291脱、357・356（ただし訂正注記あり）、370脱、658脱となっている。**青光**は南可[7]（良玄）の一校識語を有するもので、歌順に乱れがあり646・647・645、665・664、696・697・698・695、716・717・715、790脱となっている。

第二系統に属する伝本は十本ある。このうち**斯道**・**天理**・**早大**と**天類**・**樋口**は、歌順や本文などの点から、それぞれ同一の本より発生したと考えられる。また**山岸**・**後藤**も書式や本文などの点から同様のことが想定できる。もしかしたら直接の関係にある本があるかもしれない。この系統には**田中**のように室町時代に遡る古写本があるほか、本奥書から同時代に存在した写本を祖とするとわかるものがある。すなわち**田中**は文明十四年（一四八二）の書写、**多和**は明応七年（一四九八）、**天類**・**樋口**は大永四年（一五二四）の本奥書を持ち、**松井**は覚道法親王（一五〇〇―一五二七）を伝称筆者とする。諸本の中では比較的古い時期に遡り得る系統であると言えよう。

書式は伝本によって細かな差が見られる。系統全体の祖本に当たる伝本からばらばらに派生していったということなのであろう。これは本文異同が様々にあること（二―二節参照）からも支持される。この系統の特徴として挙げるべきは、合点の長短を区別する伝本が複数存在することである。『新編国歌大観』では合点の長短の別がない伝本を利用していたためこの点が知られていなかったが、前稿でも述べたように、諸本の末尾に付される後鳥羽院の勅書によれば長短を区別するのが本来の姿なのである。（本）奥書から時代を遡ることができるのと合わせて、古態を留める伝本に期待できる系統であると評価できよう。

各本の特記事項は以下の通りである。[8]**山岸**は文政元年（一八一八）書写の奥書を持ち、歌順を777－779・776とするが訂正記号がある。**後藤**とともに異同が注記してあり、**松井**の本文と一致する箇所が多いが、現存する本文に見られない異同もある。**松井**は現巻子装であるが元は冊子本であったと思われる。歌順にかなり乱れがあり、28・27、115脱、125脱、128・127、138・137、159脱、233脱、304脱、371・370、518・517、559脱、607脱、608脱、649・648、朝時雨題歌脱、849・848となっている。**斯道**・**天理**・**早大**は歌順が450脱（**斯道**・**天理**）、598・597（**斯道**）、746・745、1029・1028

となっている。**斯道**は久曽神昇氏旧蔵本[9]、**天理**は九条家本[10]である。**早大**[11]は寛永十六年（一六三九）書写の奥書を有し、元禄十一年（一六九八）に**多和**に見られる本奥書を有する本によって朱の校合・訂正を施す。**多和**は傍書や書き入れが多数ある。それは識語によれば、朱による校合[12]と明治時代の群書類従本との異同の注記であるが、どちらでもないと判断されるものもある。それが書写者の所為なのか親本由来のものであるのかは不明である。**天類**・**樋口**[13]は点取和歌類聚所収本で、歌順が153・152、392・391、536脱、609脱、809・807・808（**樋口**）、1000脱となっている。

第三系統に属する伝本は三本ある。いずれも奥書がないため、いかなる本から出たのかはわからず、相互に関係があるかどうかも判然としない。しかし主要な書式はほぼ一致し、本文的にも共通する異文を有する（二―三節参照）ことから、同一の祖本を想定してよいであろう。なお歌順の乱れは見られない。

書式の点でこの系統に特徴的なのは、一―一節で分類基準の第三とした、秋部の山家月題の下にある注記の存在である。これは本五十首では道助法親王の歌が「山里は軒ばのみねのたかければ松のはながら月ぞふけゆく」であるのに対し、続千載集（秋下・五〇一）では次のように一首が全く異なっていることを不審に思い注記されたものである[14]。

家五十首歌よみ侍りけるに、山家月　入道二品親王道助

とふ人もあらし吹きそふみやまべに木のは分けくる秋のよの月

するとこの系統は続千載集の成立（元応二年（一三二〇）返納）以降に派生したものであることになる。ただし続千載集以降の集付が見られるので、実際にはより後の時代に派生したものであろう。また出題者・加点者を落としているが、このように他出との照合まで行っているのを考えると、その時点の親本の段階で既に存在していなかったのかもしれない。

各本の特記事項は以下の通りである。**京大**は合点の長短を書き分けている。**宮書**は書陵部によれば霊元天皇宸筆の外題を持つ御所本である。**京大**・**宮書**・**内昌**全てに共通する傍書があるが、**松井**系の本に一致するものとそれ以外の本によるものとがある。

第四系統に属する伝本は四本ある。このうち**内和**・**青道**・**神宮**は歌順や書式の点から同一の本より発したと考えられる。**群書**は一部書式が異なっているが、歌順と本文から見てこの系統に分類してよいと思う。というのも**群書**は末尾に「以両本校正了」とあり、複数の本を取り合わせたものであることがわかる。この系統の伝本は総じて歌順が94・93であり（またはそうするように指示する記号がある）、これは他の系統には見られない。従って**群書**の底本はこの系統の本であったと考えられる。そして書式や本文異同から考えるに、主に第二系統の伝本を用いて作成したのではないか。そのため書式に違いが出ているのであろう。なおいずれも新続古今集（永享十一年（一四三九）返納）の集付を持つことから、それ以降に派生した系統ということになる。

主要な書式を他の系統と比べると、出題者・加点者や第一・

第三系統に見られるような注記を持たないなど、あっさりしている印象を受ける。注記は後人のものであるが、出題者・加点者については、これが本来有するものを削ったのか、それとも元々このような形であったのかはわからない。ただ合点数が比較的よい方であり、古態を残している可能性もあるので、後者ではないとは言い切れない。

各本の特記事項は以下の通りである。**内和**・**青道**・**神宮**の歌順は、前述の箇所を除くと、70・69、74脱（**神宮**）、79脱（**神宮**）、122・121（**内和**。**神宮**は訂正注記あり）、165・164（**神宮**は164脱）、192脱（**神宮**）、391脱（**神宮**）、531脱（**神宮**）、604脱（**神宮**）、677脱（**神宮**）、713・712、738・737、1047・1048・1046、1085・1086・1084となっている。**青道**は**青光**と同じく南可が一校を加えたものである。**神宮**は延宝七年（一六七九）書写の奥書を有する。

二、本文の特徴

諸本の分類を踏まえ、本文の特徴について述べる。目録及び春部に対し、**田中**の本文を基準として異同を確認した。本来であれば全体に亘って見るべきであるが、春部だけでも二十二人×十二首＝二六四首と、百首歌二つ半以上の分量があるので、おおよその傾向は見て取れるはずである。またこれ以上範囲を広げたとしても、多少の修正は要しても大幅な変更を強いられることはないと思うので、これだけの量があれば考察には十分であろう。

異同の確認に際しては以下のようにした。意味の異ならない漢字の違いや漢字・仮名の宛て方の相違は採らなかった。本文が見せ消ちや重書などにより訂正してある場合は、訂正後の本文によって比較した。集付は対象としたが傍書の本文は異同に含めなかった。ただし以上に該当する場合であっても、本文の分類に関係しそうであったり他本の異文と関わったりしそうなものは採ったところがある。また書写者の癖により判読に微妙な文字があるときは、他本に異同がない箇所であれば基準本文と同様に読んだ。以上の方法によって調査した異文の数を示したのが**表2**である。以下、これも用いながら述べてゆく。

本文の掲出に当たっては、利用の便を考慮し、Webや影印などによって公開されている本[15]に依拠することを第一とした。それがない場合は国文学研究資料館[16]に紙焼写真やマイクロフィルムが収められている本に、次いで各所蔵者から頒布された紙焼写真に拠った。従って本稿で本文を引用しているからといって、その本を利用すべきであるという意思を示しているわけではないので注意されたい。なお掲出の際は漢字と仮名の違いがあってもまとめて示した。

二-一、第一系統

まず第一系統に特有の本文を確認する。この系統に属する伝本全てに共通する異文を**高松**に拠って示すと次のようになる。[17]

・$46まの丶つきはし—まゝのつき橋
・130陰うつす—かけうすき
・$174雲ゐのかりそ—雲ゐのかりの
・$196初さくら花—初さくら哉

このうち他の系統に見えない独自の共通異文は130のみであ

る。これは初・二句の「かけうつすきしのあをやき」の「つ」を見落として「き」を重複して見てしまったことにより生じた異同であろうから、この系統の伝本でこの誤写が生じていないものが出てきた場合、これだけでは判断し兼ねることになる。そこでこの系統の過半の伝本に共通する異文を伝本の多い順に掲げると次のようになる。[18]

高松・松平・神点・青光

・139枕急かす―枕（本）かす（**高松**）枕（ママ）かす（**松平**）枕（本ノマ、）かす（**神点**）枕（本ノ）かす（**青光**）

高松・松平・青光・穂久

・同御点数付之―同御点数

・御詠―（以下ノ傍書アリ）仁和寺御室道助法親王号光台寺後鳥羽院第五皇子（**高松**）仁和寺御室道助法親王号光台寺宮後鳥羽院第五皇分（ママ）（**松平**）仁和寺御室道助法親王号光台院宮後鳥羽院第五皇□（ママ）子（**青光**）仁和寺御室道助法親王号光台寺宮後鳥羽院第五皇子（**穂久**）

・西園寺入道前太政大臣―西園寺入道前太政大臣号一条相国

・法印権大僧都幸清―（以下ノ傍書アリ）善法寺曩祖為顕昭歌門弟

・＄109みしかき夜半に―みしかきよはの

高松・松平・青光

・＄24うちきえし―うちきらし[19]

高松・松平・穂久

・＄178（集付）ナシ―続古

・＄194ふるき枝折そ―ふかきしをりそ

・＄208春はもちひぬ―春はもちゐぬ

高松・神点・穂久

・＄俊禅―俊孫

・248みつともいはし―みつともいはゝ

松平・神点・青光

・＄148ふる野のかりいほ―ふるのかり庵

松平・青光・穂久

・＄133岸（峯）の白雲―峯の白雲

次に系統内の本文の関係性を確認する。**表3**は、系統内の他本と一致する異文のうち、全伝本に共通する異文を除いた数を示したものである。これによれば、**松平・青光**の一致数の多さが際立っている。この数値のうち二十四例は、**松平・青光**にのみ見られる固有の共通異文である。両本は「道久」の署名がある本を祖とする点で共通することを一-二節で述べたが、近い位置関係にあると考えられる。**神点・青光**は一致数が二番目に多いが、これは二例を除いて集付であるので、両本の和歌本文にも同じことが言えるかどうかは、夏部以降も見てみないとわからない。この他に特定の二本の関係に取り立てて密接なものは見当たらない。

続いて各本の本文の性格を確認する。**表2**によれば、基準本文である**田中**との異文の数は、**穂久**が二十七例で最も少なく、**高松**の三十二例が続き、その他は**穂久**の二倍以上ある。**穂久**・**高松**は他の系統の伝本と比べても低い数値を示しており、歌順や書式において明らかな相違があるにもかかわらず、本文的には近い関係にあることになる。（イ）は**穂久**が最も少なく、安

定した本文を有している一方、**神点・青光**は他系統の伝本と比較しても数が多く、単純な誤りによるものが目立つ。（ロ）は前述した**松平・青光**に固有の共通異文数が影響して、両本の数値が高くなっている。系統内に共通する異文は、共通する伝本数が多ければその系統に特有の本文であると考えられるが、特定の伝本に限られる場合は誤写や改変の結果であることが多いので、気をつけるべきであろう。（ハ）は**神点**が十例あるのが目立っている。書式の面でもこの系統に属する他本とはやや違いがあるから、どこかの時点で他系統との接触があったのかもしれない。

以上を踏まえると、この系統の伝本として用いるのは**穂久・高松**がよいであろう。各本の独自異文と系統内の複数伝本に固有の共通異文数が少なく、この系統本来の本文を表していると考えられるからである。独自異文は**穂久**の方が少ないので、本文の安定度は**穂久**の方が高そうに思えるが、前稿の簡校に示したように本文の所々に空白が生じていることから、いずれか一つの伝本に依拠するのではなく、複数の伝本を比べ見ることが必要になる。そのため**高松**も併せて使うのがよいと考える。

二―二、第二系統

まず第二系統に特有の本文を確認する。本稿ではこの系統に属する**田中**を基準本文としており、この系統に属する伝本全てに共通する異文というのは存在し得ないため、**田中**を除いた過半の伝本が共通して有する異文を示す。ただし一―二節で述べたように、この系統には同一の本から発生したと考えられるものがあるから、それらはまとめて一つと数えることにした。それを共通する伝本の多い順に掲げると次のようになる。

斯道・天理・早大・山岸・後藤・多和・天類・樋口・松井
・$114（集付）続後―ナシ
・$264川浪おもき―川なみおしき

斯道・天理・早大・山岸・後藤・多和・天類・樋口
・$246（集付）同―ナシ

斯道・天理・早大・山岸・後藤・天類・樋口・松井
・$132うき草を―うき草は
・$133峯岸の白雲―嶺の白雲
・$153（集付）続拾―ナシ
・$221花のしら浪―花のしからみ

斯道・天理・早大・山岸・後藤・多和・松井
・$3（集付）新後撰―ナシ
・$5（集付）続後―ナシ
・$143（集付）新拾―ナシ

斯道・天理・早大・山岸・後藤・樋口・松井
・81風をはたのむ―風をそ頼む

斯道・天理・早大・山岸・天類・樋口・松井
・$184色にうつろふ―色そうつろふ

斯道・天理・早大・多和・天類・樋口・松井
・$131神なみの―神なひの

天理・早大・山岸・後藤・多和・松井
・$234花はさへえぬ―花はさえゝぬ

山岸・後藤・多和・天類・樋口・松井

・$46まの丶つきはし—ま丶のつきはし
斯道・天理・早大・山岸・後藤・多和
・$ 越後法橋俊暹子八幡法師仁隆弟子—ナシ
・$49しもとゆふ—しもといふ
斯道・天理・早大・山岸・後藤・天類・樋口
・$95（集付）続古—ナシ
・$183（集付）続古—ナシ
・$224（集付）同—ナシ
斯道・天理・早大・山岸・後藤・松井
・$2（集付）続後—ナシ
・$23（集付）続古—ナシ
・110さきしより—ちりしより
斯道・天理・早大・天類・樋口・松井
・$114遅くとく—遅くとき[20]
斯道・天理・多和・松井
・$260下くゝるとも—したくるゝ共
山岸・後藤・多和・松井
・$ 西園寺入道前太政大臣—ナシ
山岸・後藤・天類・樋口・松井
・$77しつのかきねも—しつか垣ねも
多和・天類・樋口・松井
・$66霞そわたす—霞そ渡る
・$141しられける—しられけり
・203花もとまらす—花もとまらぬ

集付を含めているためそれが目立ってしまっているが、本文の異同は一定数存する。ここに挙げた異同箇所は、見方を変えれば**田中**の本文が少数派であったり独自異文であったりする箇所であるということである。とりわけ$の付いたものは、他系統の伝本にも異文を同じくするものがあることを意味するので、**田中**の本文において問題のある箇所であるという可能性がある。

次に系統内の本文の関係性を確認する。表4は表3と同じ要領で示したものである。これによれば、**天類**・**樋口**の数値が極めて高く、**斯道**・**天理**・**早大**の一致数もかなり多い方である。一・二節では書式や書誌の面から**天類**・**樋口**と**斯道**・**天理**・**早大**それぞれに共通する祖本を想定したが、本文の面からもそれが裏付けられたことになる。**山岸**・**後藤**も一致数がこの中では比較的多く、異同を注記する傍書も概ね同じく書写しているので、同一の本から出ていると見てよい。また**斯道**・**天理**・**早大**と**山岸**・**後藤**、**斯道**・**天理**・**早大**と**松井**の間にやや近さが窺える。

続いて各本の本文の性格を確認する。表2によれば、基準本文との異文の数は**山岸**・**後藤**・**多和**が比較的低い数値を示している一方、**早大**・**天類**・**樋口**・**松井**は三桁に及んでいてかなり距離がある。しかも意外なことに、**山岸**・**後藤**・**多和**の数値も第一系統の**穂久**・**高松**と比べると高いのであり、書式の面では**田中**と同一系統であると判断されるにもかかわらず、距離が生じていることになる。（イ）は**松井**が他系統の伝本を含めても最も多い。ただしその異文には単なる誤写では生成し得ないようなものもあるので、必ずしも**松井**の本文が乱れているとは言

えない。その他は一桁台の伝本が多いので、各本自体の本文は安定していると言えよう。（ロ）は祖本を同じくすると考えられる**天類・樋口**と**斯道・天理・早大**がその影響もあって数値が高くなっている。その他の伝本も、伝本全体で見れば中間くらいであるが、数の少ない第一系統の**穂久・高松**と比べると多い。第二系統の伝本には「右、件写本不審繁多也、不能用捨模之畢」（**多和**の明応奥書）とか「正本依無其実文字未変之間、少々者改之処々者書残畢」（**樋口**の大永奥書）などと記すものがあって、どうも室町時代に目にすることのできた本文はあまり状態がよくなかった節がある。この系統の異文数が多いのはそのような事情もあるのだろう。（ハ）は**松井**がやや目立つ程度で、単独で他系統の伝本と関わりを持つものはなさそうである。

ところで**多和**は次のような例から**田中**との関係が窺える。

・230降けふ雨の―ふるけふ雨の

田中が「降けふ雨の」を見せ消ち傍書して「降そふ雨の」とするところ、**多和**は「ふるけふ雨の」と書いた後見せ消ち傍書して「ふりそふ雨の」としている。（**多和**の見せ消ち傍書がなされた時期は不明。）他に「けふ」とする本は今のところ見られないから、「けふ」が一致するのは特殊である。**多和**が「ふるけふ」となっているのは、**田中**のように「降けふ」となっていた本文をひらがなに直して写したためであろう。しかも**多和**は題目録の「題」の下にやや小字で「建保五十首」とあって、**田中**の外題と一致する。**多和**は前述のように明応七年の本奥書を有し、**田中**の書写年時と時代が近い。もしかしたら両本の親本またはそれに近い世代の本は同じであったのかもしれない。ただし**多和**は前掲の明応奥書で親本の本文に不審な箇所が多くそのまま写したと言っているので（実際に単純な誤りが多い）、本文の比較によって関係性を検討するのは難しい。

この系統の伝本として用いるのは、以前から**田中**がよいであろうと考えているのであるが、ここでもやはり複数の本を併せ見る必要があるだろう。今回見たように、**田中**の本文に誤りがありそうな箇所があったり、同じ系統に属する伝本であっても、本文も同一であるとは見做せなかったりするからである。この系統の伝本はそれぞれ書式に差異が見られることも思い合わされる。この系統に属する伝本全体に共通する祖本は近い世代にはなく、早い段階でばらばらに派生していったのであろう。

二―三、第三系統

まず第三系統に特有の本文を確認する。この系統に属する伝本全てに共通する異文を**京大**に拠って示すと次のようになる。

・（題目録題）ナシ―光台院殿五十首和歌
・＄同御点数付之―ナシ
・＄（作者目録題）五十首和歌―ナシ
・＄（公経ノ歌数）九首―八首
・（実氏ノ歌数）七首―八首
・（雅経ノ歌数）十九首―十六首
・＄（知家ノ歌数）二首―三首
・（行能ノ歌数）一首―二首

・＄　越後法橋俊暹子八幡法師仁隆弟子―ナシ
・＄（隆昭ノ歌数）十六首―十四首[六]
・＄（経乗ノ歌数）五首―四首
・＄（秀能ノ歌数）廿八首―廿六首[八]
・＄3（集付）新後撰―ナシ
・＄5（集付）続後―ナシ
・8春さへこゆる―春さえきゆる
・＄25（集付）ナシ―同
・＄44鶯そなく―うくひすのなく
・＄60契らまし―ちきるらし
・＄66霞そわたす―かすみそ渡る
・101雲よりうへの―雲よりうへに
・112（集付）ナシ―続後
・＄114（集付）―ナシ
・＄114遅くとく―遅くとき
・＄123岸の柳や―岸の柳の
・＄131神なみの―神なひの
・＄132うき草を―うき草は
・＄133岸[峯]の白雲―嶺の白雲
・＄142春雨も―春雨の
・＄143（集付）新拾―ナシ
・143露の枕も―露も枕も
・147野へのみとりの―のへとみとりの
・147色にみえけり―色はみえけり
・＄148ふる野のかりいほ―ふるのかりいほ[21]
・149もえぬらし―もえぬらん
・149旅ねの庵に―旅ねの床に
・＄153（集付）続拾―ナシ
・155別なは―わかれては
・＄184色にうつろふ―色そうつろふ
・＄199花そ知ける―花そちりける
・211御代なれと―御代なれは
・＄221花のしら浪―花のしからみ
・221懸たらむ―かけたはむ[22]
・＄222ふまては人を―ふまねは人を
・＄224（集付）同―続古
・＄233すむへかりけり―すむへかりける
・＄234花はさへえぬ―はなはさはらぬ
・＄243（集付）続後―ナシ
・＄246（集付）同―ナシ
・248くちなしに―くちなしと[23]
・263吉野川―芳野山
・＄264川浪おもき―河波惜き

次に系統内の本文の関係性を確認する。**表5**は**表3**と同じ要領で示したものである。これによれば、特定の二本が独自の共通異文を持つ例はそう多くない。**宮書・内昌**がやや近いという程度で、**京大・宮書**に至っては両本のみに見られる異文はない。（春部までの結果であるから全体として言えるかどうかはわからないが。）この系統に固有の異文（先に掲げたうち＄の付いていないもの）はやや数があるものの、系統内では本文が

比較的安定しているということを意味すると考えられる。おそらく現存伝本はこの系統の祖本からさほど隔たっていないのであろう。

続いて各本の本文の性格を確認する。**表2**によれば、基準本文との異文の数は各本ともやや多くなっている。これは（ロ）のうちこの系統に固有の異文の数が影響しているものと見られる。（イ）・（ハ）はどの本もほとんど見られないので、取り立てて問題のある本はなさそうである。ただし**宮書**・**内昌**に共通する異文の中には次のような箇所があることには注意を要する。

・76嵐にかこつ―山風かこつ（**宮書**）嵐（ママ）かこつ（**内昌**）

これは親本以前のある段階で「に」を脱したものをそのまま受け継いでいる例である。一方、**京大**はこの箇所をきちんと書写している。夏部以降は今回の検討範囲外であるので同様かどうかはわからないが、**京大**は損傷の少ない時点で写されたものである可能性がある。

以上を踏まえると、この系統の伝本として用いるのは**京大**がよいであろう。基準本文との異文の数や独自異文の数が最小であるからである。とはいえ**宮書**・**内昌**の異文数も同程度で、独自異文にも顕著な差があるわけでもないので、そちらを使用しても問題はない。ただ**京大**はこの系統で唯一合点の長短を区別する本でもあるから、祖本の形態をよく残しているのであろうという推測も含め、このように考えたのである。

二-四、第四系統

まず第四系統に特有の本文を確認する。この系統に属する伝本全てに共通する異文を**内和**に拠って示すと次のようになる。

・（題目録題）ナシ―道助法親王家五十首和歌
・＄　同御点数付之―ナシ
・＄（作者目録題）五十首和歌―ナシ
・御詠―（以下ノ注記[24]アリ）入道二品道助親王（**内和**・**神宮**・**群書**）入道二品道助法親王（**青道**）
・（御詠ノ歌数）廿二首―二十二首（後鳥羽院勅点）
・常盤井入道太政大臣―常盤井入道前太政大臣[25]
・＄（知家ノ歌数）二首―三首
・＄越後法橋俊暹子八幡法師仁隆弟子―ナシ
・（覚寛ノ歌数）七首―一首
・＄俊禅―俊孫
・＄46まの丶つきはし―ま丶の継はし
・64中空に―なか天も
・＄66霞そわたす（すイ）[26]―霞そわたる
・＄83みちのへや―道のへの
・88匂ふ梅かえ―にほふ梅か丶
・100山辺の霞―朝けのかすみ
・128（集付）ナシ―新続古
・＄129水の春哉―水の色哉
・133（集付）ナシ―新続古
・199花そ知ける―花としりける

・$264川浪おもき―河波おしき

次に系統内の本文の関係性を確認する。表6は表3と同じ要領で示したものである。これによれば、**内和・神宮**の一致数が最も多く、**内和・青道**、**神宮・青道**が続き、次いで**内和・群書**、**神宮・群書**となっており、**青道・群書**は関係が相対的に希薄である。**内和・神宮・青道**が歌順などから同一の本より発生したと考えられることを一―二節で述べたが、本文の一致度からもそれが確かめられたことになる。**内和・青道**と**神宮・青道**、**内和・群書**と**神宮・群書**の異文の一致数がそれぞれ同程度であるのは、**内和・神宮**が共通しかつ**青道**または**群書**と一致するものが多いからであり、**内和・神宮**は祖本を同じくする三本の中でも特に関係が深いと認められる。

続いて各本の本文の性格を確認する。表2によれば、基準本文との異文の数はこの系統もやや多めである。最小でも**青道**の五十一例で、**神宮**に至っては百例を超えている。**神宮**は（イ）の数を引いても七十例以上はあるから、該本の独自異文のみが原因なのではない。（ロ）が各本多い数値を示しているので、この系統は全体的に**田中**とはやや距離があるようである。**神宮・群書**は他系統の伝本と独自に一致する数も目立っており、**群書**は後述するが、他系統の伝本と接触したことがあったのかもしれない。**内和・青道**は（イ）・（ハ）が少ないので、この系統の本文としては安定している方である。

群書は一―二節に奥書を引用して述べたように、複数の本を取り合わせたものである。そこでは底本がこの系統の本であると考えたが、表6の異文の一致数を見ると、より具体的に言えば**内和**や**神宮**系の本であったと考えられる。そして本文作成時に使用した伝本はというと、次のような例から、第一系統と第二系統の伝本が候補に挙げられる。

・20風をうすみ―風にうすみ（**早大・斯道・天理・群書**）
・29ぬひ侘（かねイ）て（**群書**）―ぬひかねて（**早大**）
・56なからの谷は―なからの浜は（**早大・斯道・天理・松井・群書**）
・71にほひは深き―にほひそふかき（**早大・斯道・天理・松井・群書**）
・166程はくもゐにをくれぬる（もをのれまたイ）（**群書**）―ほとは雲ゐもをのれ又（**早大・斯道・天理**）
・201―又かへりこむ（**群書**）―又かへるらん（**早大・多和**）
・208春はもちひぬ―春はもちゐぬ（**高松・松平・穂久・群書**）
・255ゐての蛙は―ゐてのかはつよ（**早大・斯道・天理・松井・群書**）

ここに挙げたのは（ロ）のうち一つの系統のみが共通する異文を持つ例と、**群書**にのみ見られる傍書が他本の本文と一致する例である。現在の検討範囲からは、主に第二系統の伝本を用い、第一系統に属する本も使用した可能性がある、と結論づけられる。（ただし夏部以降には第三系統の伝本固有の異文との一致があるかもしれない。）

以上を踏まえると、この系統の伝本として用いるのは**青道**を用いるのがよさそうである。基準本文との異文の数が一応最も少ないのが**青道**であり、独自異文の一例は集付であり本文には独自のものがない。夏部以降もそう変わるものではないであろ

う。**神宮**は独自異文による誤りが極めて多く注意を要するし、**群書**は前述したように他系統との混合本文であるから、この系統の本文としては問題がある。

三、合点の分布状況

本五十首は後鳥羽院によって長短の合点が付されている。諸本は**群書**を除いて合点を有しているが、その分布は錯綜している。諸本が持つ作者目録に載る合点数と、各本の実際の合点数を示したものが**表7**である。[27] 作者目録の合点数には一部異同があるが、**田中**ほか大多数の伝本に共通する数字を用いた。また合点の長短を区別する本であっても、それが明確でない箇所があるが、そのような場合には他本の状況を参看しつつ長短を見極めた。なお合点の分布状況は**別表**に一覧して示したので、適宜参照されたい。以下、これに基づいて合点の分布状況を概観する。

まず合点の総数は、**表7**によれば、目録の数と全く同数の合点を持つ伝本は存在しない。総数として非常に近いのは第二系統に属する**田中**・**早大**であり、その差はそれぞれ一、二と際立っている。しかし歌人別の数を見てみると、四人の数に違いがあって、単純に数が不足しているというわけではない。これに続くのが第四系統の**青道**・**内和**であり、**青道**は目録の数と異なる歌人が三人と最も少ない。諸本から目録の数と一致するものを取り合わせたとしても、覚寛と秀能の歌数に不足が生じてしまい、完全に一致させることはできない。合点をよく残している系統は、系統ごとに伝本数が異なるので単純な比較はできないものの、第四系統は目録との差が十未満となっているほか、第二系統でも合点の長短を区別している本は、比較的よい状態にあるようである。

合点の総数に関しては、そもそも目録に見える数が真であるかということや、当初から漏れがなかったかという問題もある。なぜなら各歌人が詠進して後鳥羽院が合点を付したときの形と、現在見ることのできる形は異なっていると考えられるため、形態が変わる際に数え間違えたり合点を写し落としたりする可能性があるからである。本五十首は単独本、古筆切いずれも題別にまとめられているが、五十首が提出されて合点を付したときは歌人別に一巻ずつであったと推測される。それは室町時代の入道永助親王の日記（後常瑜伽院御室日記）に「光台院五十首和歌正文廿二巻」とあって、この数は五十首の詠進人数と一致するから一人一巻を当てていたということを意味するし、本五十首末尾に付された後鳥羽院の勅書には「五巻之詠」とあって、五巻は五人分のことであろうことから推測できる。つまり後鳥羽院が合点を付したのは、個々人が詠進した百首それ自体であったと考えられ、それをその後題別にまとめ直したわけであるから、その際に誤ってしまった可能性もなくはないのである。

次に長合点を見てみると、合点の長短を区別しているのは七本ある。前稿では**田中**しか長短の実情が明らかでなかったが、今回の調査によって比較検討することが可能となった。七本の内訳は第一系統が**松平**、第二系統が**田中**・**早大**・**山岸**・**後藤**・**多和**、第三系統が**京大**で、第四系統は合点数がよいにもかかわ

らず、長短を区別するものは存在しない。長合点の数は最大が**田中**の九十五、最少が**京大**の六十二となっていて、かなりの違いがある。ただ歌人別の数を見ると、値としては顕著な差があるものはそれほど多くないから、ある程度絞り込むことは可能であろう。なお長合点の数は目録に載っていないため、いくつが正解であるのかはわからない。

総じて合点は、書写の際に脱落したりずれてしまったりして、混乱の生じていることが多い。それは本五十首も同じであって、どれか一本だけを使って考察するのは問題がある。従っていくつかの本を相互に参照しつつ見てゆく必要がある。合点の数は**田中**・**早大**・**青道**・**内和**などに拠りつつ、長合点を持つ本をも用いて考察することが求められよう。

おわりに

本稿では、道助法親王家五十首の伝本についての基礎的整理の報告として、諸本を分類し、本文の特徴について述べ、合点の分布状況を示した。諸本は主に書式における三つの基準によって、四つの系統に分類することができる。このうち第二系統は室町時代に遡り得る系統であり、合点も本来の形を残しているなど注目される。しかし本文・合点ともに特定の系統や伝本に依拠することができるほど優劣があるわけではない。そのため考察に際しては、常に複数の系統の伝本を比較参照する必要がある。

本来、伝本研究は諸本全てをこの目で見た上で記述すべきであると思うが、そうした見方からすれば、本稿の報告は極めて不十分なものとなった。このような結果になったのはもちろん本意ではないのだが、基礎的な整理としては一定以上のことはできたと思うので、これで一応の区切りとしたい。そもそも研究費を得られる立場にない者が行う研究は私費なのであるから、そこには当然限界がある。近年推進されている古典籍のデジタル化は、そのような研究を後押ししてくれ、今回の調査においても多大な恩恵を受けた。しかし最終的にはやはり実地調査が必要となるのは言うまでもない。然るべき立場の人がその責務を果たして、こうした研究を推進していって欲しいと心から思う。

注

（1）伝藤原為家・家隆筆切と伝甘露寺親長筆切があり、前者については田中登「光台院五十首における歌人排列の問題点―古筆切を手がかりに―」（『古筆切の国文学的研究』、風間書房、一九九七、初出一九九四）及び別府節子「自詠自筆の和歌資料を中心とした中世古筆資料」（『出光美術館研究紀要』十六、二〇一一）を、後者については徳川黎明會編『鳳凰台・水茎・集古帖』（徳川黎明會叢書古筆手鑑篇四、思文閣出版、一九八九）を参照されたい。なお伝為家・家隆筆切は、上記論文に掲載されていないものがいくつか諸所に存在するようである。

（2）今回分類できなかった伝本は、前稿で挙げたものに加え、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本（A二九四）と田口暢之氏蔵本（略称「**田口**」）がある。後者については部分的にわかっていることもあるので、適宜言及する。

（3）前稿でも断ったように、系統に付した数字は本文の優劣を意味するものではない。掲出の順は所蔵機関の五十音順とし、親本あるいはそれに近い世代の本が同一であると考えられるものには**＊**を付し

て続けて掲げ、版本は末尾に回した。

(4) 掲出の順は、諸本の関係性を視覚的にわかりやすくするため、書式が類似するものを近くにまとめるようにした。そのため一―一節の順番とは若干のずれが生じている。

(5) これが誰であるかはまだ特定できていない。

(6) 631・630の順であることは除いて列挙する。以下同じ。

(7) 南可については上野洋三「良玄　略年譜」（『元禄和歌史の基礎構築』、岩波書店、二〇〇三、初出一九九三）などを参照。

(8) **田中**については前稿を参照されたい。

(9) 堀川貴司「新収資料一覧（その三）」（『斯道文庫論集』五十四、二〇二〇）参照。

(10) 『天理図書館稀書目録』和漢書之部第五参照。

(11) 注2で言及した**田口**は、書式や本文の点から、早大と同一の本より発したと思しい。該本には藤原某から典侍局へ宛てた書状の写が付いており、本五十首の概要や詠歌の手本となること、禁裏の本を写したことなどが述べられている。

(12) 本文のみならず、集付や合点にまで及んでいるようである。実見できておらず本稿では紙焼写真からの判断となるので、正確性は保証できない。

(13) 『天理図書館稀書目録』和漢書之部第二に著録されており、「永宣」の書写に係るという。

(14) この続千載集所収歌は、鎌倉時代成立の私撰集である雲葉集（秋中・五一二）には「題不知」で尊快法親王（後鳥羽院皇子）の歌として入集している。題林愚抄（秋三・四一八九）には続千載集を典拠として道助の歌として採っているから、流布していた続千載集では道助の歌と誤っていたのであろう。作者・官位表記の不統一などと同様、撰者の二条為世がこの時かなりの老齢であったことによるか。なお勅撰作者部類（小川剛生『中世和歌史の研究―撰歌と歌人社会―』（塙書房、二〇一七）所収翻刻に拠る）では道助・尊快ともに続千載集への入集の注記はない。

(15) **高松**・**松平**・**青光**・**穂久**・**早大**・**山岸**・**後藤**・**京大**・**宮書**・**内昌**・**内和**・**青道**が該当する。

(16) **神点**・**多和**・**天類**・**樋口**・**松井**・**神宮**が該当する。

(17) 分類の指標を示す意味もあるので、煩をいとわず全て掲げることにした。$は他の系統に同じ異文を有する伝本が存在することを示す。以下同じ。

(18) 本文の後ろに略称が付いている場合は、その伝本の本文であることを表す。（複数ある場合は最初に掲げた伝本に拠る。）特に略称がない場合は、傍線を付した伝本によって代表させた。以下同じ。

(19) **青光**は「え」を見せ消ちして「ら」とする。

(20) 朱による異同が注記されているが、それは除いて示した。以下同じ。

(21) **京大**は「ふるのいかりいほ」となっている。

(22) **京大**は「ら」の上に「は」を重書しているように見える。

(23) **京大**は「くちなしの」の「の」を見せ消ちして「と」とする。

(24) **内和**・**神宮**・**群書**は小字注記とし、**青道**は傍書とする。

(25) **内和**・**神宮**・**群書**は傍書ではなく小字注記とする。

(26) **神宮**は傍書を持たない。

(27) 一―一節では分類の対象とできなかった久保田淳氏蔵本（略称「**久保**」）は日本古典文学会編『新撰六帖　御室五十首　光台院五十首』（日本古典文学影印叢刊十五、貴重本刊行会、一九八一）に掲載される合点表に基づいた。

表１　主要書式一覧

		内題	作者目録位置	作者位置	歌の御詠表記	合点 長短	山家月題 下注記	題者点者	630/631 の順	良宗 注記
第一系統	高松	光台院五十首	題と歌の間	初春題は歌前、以降無	有	無	無	有 御詠注記も	630/631	有
	青光	五十首和歌	題と歌の間	初春題は歌前、以降無	有	無	無	有 御詠注記も	630/631	有
	穂久	五十首和歌	題と歌の間	初春題は歌前、以降無	有	無	無	有 御詠注記も	630/631	有
	松平	五十首和歌	題と歌の間 一段組み	歌前	有	無 途中から有	無	有 御詠注記も	630/631	有
	神点	五十首和歌	題なく歌の前	初春題は歌下、以降無	有	無	無	題者のみ	630/631	無
第二系統	田中	五十首和歌	題と歌の間	歌下	初春題のみ	有	無	有	631/630	無
	山岸	五十首和歌	題と歌の間 一段組み	歌下	無	有	無	有	631/630	無
	後藤	五十首和歌	題と歌の間 一段組み	歌下	無	有	無	有	631/630	無
	松井	五十首和歌	題の前	歌下	無	無	無	有	631/630	無
	斯道	五十首和歌	題の前	歌下	無	無	無	有	631/630	無
	天理	五十首和歌	題の前	歌下	無	無	無	有	631/630	無
	早大	光台院五十首和歌	題の前	歌前	無	有	無	有	631/630	無
	多和	五十首和歌	無（初春題歌が兼ねる）	初春題は歌前、以降歌下	雪中鶯題まで	有	有 （校合カ）	有	631/630	無
	天類	光台院五十首和歌	無（初春題歌が兼ねる） 点数は末尾	初春題は歌前、以降歌下	有	無	無	有	631/630	無
	樋口	光台院五十首和歌	無（初春題歌が兼ねる） 点数は末尾	初春題は歌前、以降歌下	有	無	無	有	631/630	無
第三系統	京大	光台院殿五十首和歌	末尾	初春題は歌前、以降歌下 途中から無	有	有	有	無	631/630	無
	宮書	光台院殿五十首和歌	末尾	初春題は歌前、以降歌下	有	無	有	無	631/630	無
	内昌	光台院殿五十首和歌	末尾	初春題は歌前、以降歌下	有	無	有	無	631/630	無
第四系統	内和	道助法親王家五十首和歌	題と歌の間	歌下	初春題のみ	無	無	無	631/630	無
	青道	道助法親王家五十首和歌	題と歌の間	歌下	初春題のみ	無	無	無	631/630	無
	神宮	道助法親王家五十首和歌	題と歌の間	歌前	初春題のみ	無	無	無	631/630	無
	群書	道助法親王家五十首和歌	題と歌の間	初春題は歌前、以降無	有	合点無	無	有	631/630	無

歌の御詠表記：道助法親王の歌の作者欄に「御詠」とあるか否か。
良宗注記：「良宗案」で始まる注記を持つか否か。

表３　第一系統内で他本と一致する異文の数

	高松			
松平	11	松平		
神点	5	3	神点	
青光	7	39	16	青光
穂久	11	9	2	6

表２　田中との異文の数

		イ	ロ	ハ	総数
第一系統	高松	11	20	1	32
	松平	11	49	6	66
	神点	37	25	10	72
	青光	26	58	4	88
	穂久	4	16	7	27
第二系統	斯道	3	72	2	77
	天理	4	75	0	79
	早大	23	75	3	101
	山岸	3	39	1	43
	後藤	6	39	0	45
	多和	26	24	5	55
	天類	1	104	1	106
	樋口	5	105	0	110
	松井	69	44	8	121
第三系統	京大	1	54	2	57
	宮書	6	57	2	65
	内昌	2	60	0	62
第四系統	内和	3	69	0	72
	神宮	49	66	11	126
	青道	1	45	5	51
	群書	19	42	22	83

イ：独自異文
ロ：系統内の少なくとも一本以上の他本と一致するもの
ハ：他系統に見られる異文と単独で一致するもの

表５　第三系統内で他本と一致する異文の数

	京大	
宮書	0	宮書
内昌	3	6

表４　第二系統内で他本と一致する異文の数

	斯道							
天理	71	天理						
早大	68	71	早大					
山岸	26	27	27	山岸				
後藤	25	27	27	36	後藤			
多和	11	12	12	13	12	多和		
天類	15	15	15	13	12	10	天類	
樋口	16	16	16	14	13	10	104	樋口
松井	28	29	28	22	19	15	17	18

表６　第四系統内で他本と一致する異文の数

	内和		
神宮	40	神宮	
青道	24	21	青道
群書	16	15	1

表7　合点数

	目録	第一系統						第二系統															第三系統				第四系統			
		高松	松平		神点	青光	穂久	田中		斯道	天理	早大		山岸		後藤		多和		天類	樋口	松井	京大		宮書	内昌	内和	神宮	青道	久保
			全体	長				全体	長			全体	長	全体	長	全体	長	全体	長				全体	長						
道助	22	19	21	7	19	19	19	22	9	22	22	23	8	21	8	21	8	20	9	22	22	21	23	7	23	23	23	22	23	20
公経	9	8	8	1	9	9	9	9	1	8	8	9	0	9	1	9	1	8	1	8	8	8	8	1	8	8	8	8	9	8
実氏	7	7	8	0	6	7	7	7	1	7	7	7	1	7	1	7	1	7	2	6	6	6	7	0	7	7	6	6	6	6
定家	27	27	24	16	28	25	28	27	14	26	26	27	11	27	14	27	14	26	14	22	22	24	26	12	26	26	27	27	27	24
雅経	19	20	18	9	19	19	18	19	13	18	18	19	9	19	12	19	12	19	12	17	17	18	18	8	17	17	19	19	19	18
家衡	1	0	1	1	1	2	1	2	0	1	1	2	0	1	1	1	1	2	1	0	0	3	1	0	1	1	1	1	1	1
家隆	28	28	26	14	27	26	26	28	19	28	28	28	15	26	14	25	15	27	17	27	27	25	28	12	27	27	27	27	28	25
保季	3	3	2	0	3	2	3	4	0	4	4	3	0	4	1	4	1	3	0	4	4	3	4	1	3	4	3	3	3	2
知家	2	2	2	1	1	2	2	2	1	1	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	3	2	1	0	1	1	2	2	2	2
定範	7	7	7	1	7	7	7	7	2	7	7	7	1	7	1	6	1	7	1	6	6	6	7	2	6	6	7	6	7	7
範宗	4	4	4	1	3	4	4	4	1	4	4	4	1	4	1	4	1	2	1	3	3	4	4	1	4	4	4	3	4	4
信実	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	0	2	0	2	0	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	2	2
行能	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1
幸清	11	10	11	8	10	11	10	11	9	11	11	11	8	10	8	10	8	10	8	10	10	10	11	7	9	11	11	11	11	11
覚寛	7	7	7	1	6	7	7	7	3	7	7	7	3	7	3	6	2	6	2	6	6	6	7	2	6	7	6	6	6	7
隆昭	16	13	13	4	14	12	13	14	5	12	12	14	4	14	4	14	4	14	4	12	12	13	14	3	11	13	14	14	14	14
経乗	5	4	5	1	3	5	4	5	1	4	4	4	1	5	1	5	1	4	1	3	3	3	4	0	4	4	5	5	5	4
家長	4	3	4	0	4	4	4	4	0	3	3	4	0	4	0	4	0	4	0	2	2	2	3	0	3	3	4	4	4	4
光経	3	3	4	0	3	4	3	3	0	3	3	3	0	3	0	3	0	3	0	1	1	2	3	0	3	3	3	3	3	3
孝継	8	8	8	3	7	8	8	8	3	8	8	8	3	8	4	8	4	8	3	7	7	8	8	1	8	8	8	7	8	7
秀能	28	25	22	10	18	20	23	27	12	25	25	27	8	26	9	24	9	23	9	16	16	24	25	4	21	23	27	27	27	26
俊禅	6	6	7	0	5	6	6	6	1	5	5	6	1	6	1	6	1	5	1	2	2	5	6	1	6	6	6	6	6	6
計	220	207	205	78	196	202	205	219	95	207	207	218	75	213	85	208	85	203	87	179	180	196	211	62	197	205	214	210	216	202

目録の数字と一致しないものに色を付けた。

別表　合点一覧

・空欄は合点があり、×はないことを表す。
・合点が長いものは「長」、他本にある合点を移したものは「イ」とした。

＊1　（朱書）「イニ無点」。
＊2　「此無イニ有」。
＊3　合点を付けた後に白で抹消する。
＊4　「此点イ本ニアリ」。
＊5　887に合点を付すも白で抹消する。
＊6　「イニ無点」。
＊7　（朱カ）「イ」。墨合点の上に朱合点を重ねるか。
＊8　朱合点か。
＊9　（朱カ）「イナシ」。
＊10　墨合点の上に朱合点を重ねるか。
＊11　「イナシ」（朱墨不明）。
＊12　「イニ点ナシ」。
＊13　合点があるが消去記号のようなものを付す。
＊14　朝時雨題の歌自体が脱落していることによる。

作者		隆	秀	道	公	実	定	雅	衡	隆	経	秀	道	定	隆	保	範	宗	雅	道	公	実	定	雅	隆	範
歌番号		7	21	23	24	25	26	27	28	29	39	43	45	48	51	52	54	55	71	89	90	91	92	93	95	98
第一	高松								×							×	×					×				
	松平		×						×			×	×			×	×		長		×		長	×	長	
	神点								×							×	×					×				
	青光		×						×			×	×			×	×					×				
	穂久								×							×	×					×				
第二	田中	長		長					×	長		長	長		長	×	×	長	長			×		長	長	
	斯道								×		×					×	×					×		×		
	天理								×		×					×	×					×		×		
	早大	長		長					×	長	×			*1		×	×					×	*1		長	
	山岸			長					×	長		長	×		長	×	×	長	長			×		長	長	
	後藤	長		長					×	長		長	×		長	×	×	長	長			×		長	長	
	多和	長		長					×	長	×	長*7	長*7	*7	長*7	×	×	*8	長	*8	*8	×	*8	長*9	長	
	天類								×		×											×	×	×		
	樋口								×		×											×	×	×		
	松井	×		×							×					×	×					×				
第三	京大			長					×		×		長			×	×	長				×		×	長	
	宮書								×		×					×	×					×		×		×
	内昌								×		×					×	×					×		×		×
第四	内和								×							×	×					×			×	
	神宮								×							×	×		長			×			×	
	青道								×							×	×					×				
	久保								×	×	×					×	×					×		×		

作者		覚	昭	孝	秀	定	道	昭	秀	道	定	雅	衡	宗	孝	俊	道	定	雅	衡	隆	宗	秀	定	隆	覚
歌番号		103	104	108	109	114	133	148	153	155	158	159	160	165	174	176	177	180	181	182	183	187	197	202	205	213
第一	高松												×							×						
	松平		×	長		×	長		×	長		長	×		長			×	×	長		長	長		長	
	神点				×		×						×	×					×		×		×			
	青光		×					×	×				×					×	×							
	穂久												×						×		×		×			
第二	田中	長		長		×	長			長		長	×		長				×		長		長		長	
	斯道					×							×						×	×						
	天理					×							×						×	×						
	早大	長		長		×	長			長		長	×		長				×	×		長	長		長	
	山岸	長		長		×	長			長		長	×		長				×	長	×		長		長	
	後藤	長		長		×	長			長		長	×		長				×	長	×		長		長	
	多和	長		長		×	長			長		長	×	長*8	長				×	長*9	長*8	長	長		長	
	天類					×	×						×	×					×	×			×		×	×
	樋口					×	×						×	×					×	×			×		×	×
	松井					×		×											×	×						×
第三	京大					×							×						×	×	長					
	宮書					×		×					×						×	×						×
	内昌					×							×						×	×						
第四	内和					×							×						×							
	神宮					×							×				×		×							
	青道					×							×						×							
	久保					×				×			×						×	×						

作者		秀	公	実	定	隆	昭	道	定	雅	隆	経	孝	秀	秀	定	道	実	定	隆	覚	秀	雅	昭	道	定
歌番号		219	222	223	224	227	236	243	246	247	249	259	262	263	351	378	397	399	400	403	411	417	423	434	441	444
第一	高松	×			×								×				×	×		×						
	松平	×			×	長		×	長	長	×		×	長		長		×	長	×			長	長	長	長
	神点	×			×							×	×		×			×		×						
	青光	×			×			×					×	×				×		×						
	穂久	×			×					×	×		×					×		×						
第二	田中				×	長		長	長	長			×					×		×			長	長	長	長
	斯道				×								×	×			×	×		×						
	天理				×								×	×			×	×		×						
	早大				イ*2	長		長	長	長			×					×		×			長	長	長	長
	山岸				×	長		長	長	長			×					×		×			長	長	長	長
	後藤	×			×	長		長	長	長			×					×		×			長	長	長	長
	多和				×	長		長	長	長			×		長*8			×		×			長	長	長	長
	天類				×								×	×		×		*12				×				
	樋口				×								×	×		×		*12				×				
	松井				×									×				×	×	×		×				
第三	京大				×	長		長	長	長	長		×	×				×		×						
	宮書	×			×					×			×	×				×		×				×		
	内昌				×					×			×	×				×		×						
第四	内和			×	×								×					×		×	×					
	神宮			×	×								×					×		×	×					
	青道			×	×								×					×		×	×					
	久保				×						×		×	×			×	×		×						

作者		雅	隆	秀	道	定	雅	隆	経	秀	定	道	実	定	隆	保	昭	光	孝	秀	道	定	隆	保	知	昭
歌番号		445	447	461	463	466	467	469	479	483	488	507	509	510	513	514	522	525	526	527	529	532	535	536	537	544
第一	高松								×		×							×						×		
	松平		長	長	長	長		長	長		×			長	長	×	長					長	長	×	長	長
	神点			×							×							×						×		
	青光				×						×					×								×		
	穂久									×	×							×						×		
第二	田中	×	長			長		長	長	長	×			長	長		長					長	長	×	長	長
	斯道	×									×														×	
	天理	×									×														×	
	早大	×	長			長		長	長					長	長		長					長	長	×*3	長	長
	山岸	×	長	×		長		長	長		×			長	長		長					長	長	×	長	長
	後藤	×	長	×		長		長	長		×			長	長		長					長	長	×	長	長
	多和	×	長	長*8		長		長	長		×			長	長		長			長*8		長	長	長*8	長*9	長
	天類	×									×									×				×		
	樋口	×									×									×				×		
	松井	×									×					×			×					×		
第三	京大	×				長					×			長	長							長		長	×	長
	宮書	×		×							×													×	×	
	内昌	×									×														×	
第四	内和	×									×													×		
	神宮	×									×													×		
	青道	×									×													×		
	久保	×									×	×	×	×	×	×			×			×		×		

作者		定	幸	秀	定	雅	秀	道	雅	隆	範	宗	孝	秀	実	定	雅	衡	隆	秀	道	隆	宗	幸	昭	光
歌番号		554	564	571	576	577	593	595	599	601	604	605	614	615	619	620	621	622	623	637	639	645	649	652	654	657
第一	高松											×						×								
	松平	長	長	長			長		長		長	×				長		×	長	長						
	神点						×					×	×	×				×								
	青光											×						×								
	穂久											×						×								
第二	田中	長	長	長		長	長		長		長	×				長	長	×	長	長						
	斯道											×						×								
	天理											×						×								
	早大	長	長	長		長	長		長		長	×								長						
	山岸	長	長	長		長	長		長		長	×				長	長	×	長	長						
	後藤	長	長	長		長	長		長		長	×				長	長	×	長	長						
	多和	長	長	長		長	長	*10	長		長	×				長	長	×	長	長						
	天類			×							×					×		×		×			×	×		×
	樋口			×							×					×		×		×			×	×		×
	松井											×						×								
第三	京大	長				長			長		長	×				長	長	×	長							
	宮書			×								×		×				×								
	内昌			×								×		×				×								
第四	内和											×						×								
	神宮										×	×						×					×			
	青道											×						×								
	久保											×						×								

作者		秀	俊	定	幸	公	実	定	隆	範	昭	経	家	光	秀	公	雅	衡	隆	保	行	昭	経	秀	俊	隆
歌番号		659	660	664	674	684	685	686	689	692	698	699	700	701	703	706	709	710	711	712	717	720	721	725	726	733
第一	高松	×	×															×		×						
	松平	長	×	×		長											長	×	長	×						×
	神点	×					×											×		×			×		×	
	青光	×	×					×												×						×
	穂久	×	×															×		×		×	×			
第二	田中	長	×		長	長		長							長		長		長						長	長
	斯道		×																	×						
	天理		×																	×						
	早大	長	×												長		長		長	×					長	
	山岸	長	×		×	長		長							長		長	×	長	×					長	
	後藤	長	×		×	長		長							長		長	×	長	×					長	
	多和	長	×		*8	長	長	長							長		長		長	×					長	
	天類	×	×				×	×		×	×	×	×	×	×		×	×		×				×	×	
	樋口	×	×				×	×		×	×	×	×	×	×		×	×		×				×	×	
	松井		×			×*14	×	×	×	×	×	×	×	×	×											
第三	京大	長	×		長	長		長							長		長		長	×					長	長
	宮書		×		×														×	×						
	内昌		×																×	×						
第四	内和		×															×		×						
	神宮		×															×		×						
	青道		×															×		×						
	久保		×																	×						

作者		光	孝	秀	道	定	幸	覚	秀	俊	公	定	雅	隆	保	秀	俊	道	定	秀	幸	定	隆	保	昭	俊
歌番号		745	746	747	749	752	762	763	769	770	772	774	775	777	778	791	792	793	796	813	828	840	843	844	852	858
第一	高松												×		×			×			×					
	松平				長	長							×	長	×	長			長	長	長	長				
	神点			×									×		×			×			×					×
	青光												×		×			×	×							
	穂久				×								×		×			×			×					
第二	田中	×		長	長	長								長	×	長		×	長		長	長				
	斯道	×													×				×							×
	天理	×													×				×							×
	早大	×			長	長								長	×	長			亻長*4		長	長				
	山岸	×			長	長								×	長	長		×	長		長	長				
	後藤	×			長	長			×					×	長	長		×	長		長	長	×			
	多和	×			長	長			長*8	長*8				長	×	長		×	長*11		長	長				
	天類	×	×	×						×					×	×	×		×						×	×
	樋口	×	×	×						×					×	×	×		×						×	×
	松井	×													×			×								
第三	京大	×		長	長	長								長	×	長		長	×		長	長				
	宮書	×													×				×							
	内昌	×													×				×							
第四	内和	×													×											
	神宮	×													×											
	青道	×													×											
	久保	×													×				×							

作者		公	雅	幸	孝	道	公	定	雅	幸	昭	定	隆	幸	昭	孝	秀	俊	道	雅	隆	知	信	昭	道	公
歌番号		860	863	872	878	881	882	884	885	894	896	906	909	916	918	922	923	924	925	929	931	933	936	940	947	948
第一	高松					×									×			×								×
	松平		長	長	長	×		長		長		長		長	×					長						
	神点					×									×			×				×				
	青光					×							×		×			×								
	穂久					×									×			×								
第二	田中		長	長	長	×		長		長		長		長	×			×		長				長		
	斯道						×								×			×								
	天理						×								×			×								
	早大		長	長	長			長	*5	長		長		長	×			×		長						
	山岸		長	長	長	×		長		長		長		長	×			×		長						
	後藤		長	長	長	×		長		長		長		長	×			×		長						
	多和		長	長	長	長*8		長		長		長		長	×			×		長						
	天類						×								×			×								
	樋口						×								×			×								
	松井			×		×			×									×								
第三	京大		長	長	長		×	長				長		長	×			×		長				長		
	宮書						×			×	×				×			×								
	内昌						×				×				×			×								
第四	内和	×				×									×			×								
	神宮	×				×									×			×								
	青道					×									×			×								
	久保						×								×			×								

作者		定	隆	幸	孝	道	雅	隆	範	信	覚	家	道	雅	隆	幸	覚	家	孝	道	実	隆	範	覚	昭	家
歌番号		950	953	960	966	969	973	975	978	980	983	986	991	995	997	1004	1005	1008	1010	1013	1015	1019	1022	1027	1028	1030
第一	高松	×				×													×						×	×
	松平	長		長			長	長			長				長	長			×	長					長	
	神点					×											×		×							
	青光																		×							
	穂久					×													×							
第二	田中	長		長			長	長	長		長				長	長			×	長	長			長	長	
	斯道					×												×	×						×	
	天理					×												×	×						×	
	早大	長*6		長		×	長	長			長				長	長			×	長	長			長	長	
	山岸	長		長	長		長	長			長				長	長			×	長	長			長	長	
	後藤	長		長	長		長	長	×		×				長	長			×	長	長			長	長	
	多和	長		長		*9	長	長			長				長	長		*9	×	長	長			長*8	長	
	天類					×		×										×	×							
	樋口					×		×										×	×							
	松井	×													×				×							×
第三	京大	長		長		×	長	長	長		長					長		×	×	長				長	長	
	宮書					×												×	×							
	内昌					×												×	×							
第四	内和																		×							
	神宮				×														×							
	青道																		×							
	久保				×	×																				

作者		秀	俊	道	実	定	雅	隆	保	範	幸	昭	秀	道	定	雅	隆	知	範	秀
歌番号		1033	1034	1035	1037	1038	1039	1041	1042	1044	1048	1050	1055	1057	1060	1061	1063	1065	1066	1077
第一	高松													×				×		
	松平					×		長			長		長	長			長	×		×
	神点													×				×		
	青光																	×		×
	穂久													×				×		
第二	田中						長	長			長		長	長			長	×		長
	斯道											×						×		×
	天理											×						×		×
	早大							長			長		長	長			長	×		
	山岸							長			長		長	長				×		
	後藤							長			長		長	長				×		
	多和			長*8				長			長		長	長			長	×		*8
	天類				×													×*13		
	樋口				×															
	松井		×															×		
第三	京大							長			長			長			長	×		×
	宮書																	×		×
	内昌																	×		×
第四	内和																	×		
	神宮																	×		
	青道																	×		
	久保																	×		

（おおた・かつや）